

宇宙とツーリズム — フロンティアの向こうへ

Public Forum: Space and Tourism: Beyond the Frontier

寺 門 和 夫

科学ジャーナリスト・公立小松大学客員教授

山 崎 直 子

宇宙飛行士・公立小松大学学長特別補佐

中 子 富貴子

公立小松大学

杓 谷 茂 樹

公立小松大学

「果てへの旅」とツーリズム

2019年10月26日に開催された市民公開フォーラム「宇宙とツーリズム — フロンティアの向こうへ」では、公立小松大学ならではのパネリストによる興味深い話題が取り上げられました。ここでいう「宇宙」とは、空間的な「地の果て」であるだけでなく、「知識の果て」であり、「時間の果て」であり、「想像力の果て」でもあるのです。

最初にプレゼンテーションを行った宇宙飛行士・学長特別補佐の山崎直子さんは、まず「宇宙ツーリズム」に関して述べました。現在、宇宙ツーリズム推進協議会という組織ができており、各地での星空観察に取り組んでいます。日食ツアーは以前からありますが、現在では多くの方が日本各地で星空の美しさにふれるツーリズムがさかんになっています。「宇宙」と「ツーリズム」という言葉からは、現在話題になっている宇宙観光旅行を思い浮かべる方も多いと思います。山崎さんからは、こうした宇宙観光旅行は、いわゆるサブオービタル飛行（宇宙に少しだけ顔を出して帰ってくる飛行）であれば、もう少しで実現するところまできているという報告がありました。

国際文化交流学部准教授の中子富貴子さんは、「世界の果て」への人間のあこがれという観点から、ツーリズムを考察しています。自分の知らない未知の場所に行きたいという願望はツーリズムの原点です。中子先生が語ったように、ジョルジュ・メリエスがジュール・ベルヌの『月世界旅行』（1865年発表）を映画にしたのは1902年でした。そんな昔から、人間は想像力で未知の世界に行くことを考えていたのです。中子さんはまた、ツーリズムの対象となる世界の果ては、探検家や先駆者の活動によって次第に私たちに身近なものになるというプロセスを指摘しています。そして、この人間の営みこそが、常に新しいツーリズムを生み出しているのです。

国際文化交流学部教授の杓谷茂樹さんはマヤの古代文明が専門です。宇宙とは最も遠い分野のように思われますが、中子さんの論点をふまえれば、古代文明への旅もきわめて魅力的なツーリズムとなるわけです。マヤのピラミッドを単なる観光名所として訪れるのは、もったいない気がします。失われてしまった古代文明の研究は、私たちが知らない世界観や価値観を教えてくれるからです。それを知ることこそ、遠く時間をさかのぼる旅の醍醐味でしょう。もっとも、そのようなツアーには、杓谷さんのようなコンダクターが必要でしょうが。

(寺門和夫)

(第1報告)

宙ツーリズム Astro Tourism

観光庁の「テーマ別観光による地方誘客事業」の一つとして、平成30年度から「宙（そら）ツーリズム」が採択された。行ってみる宇宙から、見上げる空・星空まで、観光資源として捉え直し、全国的なネットワークを創ることで情報発信力を強化し、地方創生とインバウンド強化に寄与することが目的である。

観光産業は、世界GDPの10%になる複合産業である。私は宙ツーリズム推進協議会の理事を務めているが、日本がこれから更に力を入れようとしている、インバウンドやナイトツーリズムの強化に繋がるものと期待している。

1961年にユーリ・ガガーリン氏が人類初の宇宙飛行を成功させてから、これまでの間に宇宙に行った人の数は世界で600名弱になる。当初はソ連及びアメリカの軍人のみが宇宙飛行士になったが、今では日本を含め40カ国近くの国から宇宙飛行者が出ている。有人宇宙船を保有してきた国は、ロシア（旧ソ連）、アメリカ、中国の3カ国であるが、これだけの国から宇宙飛行者が輩出されてきたのは、国際協力のお蔭である。更には、宇宙旅行として国際宇宙ステーション（ISS）に滞在した7名の旅行者も含まれている。ISSの中では、国籍、文化、言語、宗教、性別、年齢が多様なチーム編成が組まれており、今年アラブ首長国連邦（UAE）初の宇宙飛行士もISSに滞在し、アラブの民族衣装を着用していた。ちなみに、私がISSに滞在した際も、日本の法被を持参していった。

近々、サブオービタル宇宙旅行の商業化がアメリカで実現する見込みである。100kmの宇宙まで到達し、数分間無重力を体験した後、戻ってくるものである。宇宙船は、垂直に離発着するものと、飛行機のように水平に離発着するものがあり、日本でも複数のスタートアップ企業が開発に取り組んでいる。観光大国として日本でも、宇宙旅行が、そしていずれは宇宙を通りながら他の国に行けるようになる二地点間輸送が実現できるよう、スペースポート整備の準備も行なって

いるところである。

非日常の体験がツーリズムの醍醐味であることを考えると、宇宙とツーリズムの連携がこれから益々大切になると考える。

(山崎直子)

(第2報告)

世界の果てツーリズム Tourism into the Beyond

人類のこれまでのツーリズムの営みには、「果て」へのあこがれとそこへの到達願望の歴史という一面がある。

「果て」とは何であろうか。私たちの文明や社会の向こうにあるどこか、手の届かない場所、未知の世界といった意味で考えればいいだろう。その果てを私たちはどのように想像し、現実に到達しようとしてきたのだろうか。前人未踏の果ては、当初フィクションによって私たちの前に提示されていた。100年以上前にジュール・ベルヌによって書かれた「月世界旅行」、それを映像で見せたのはジョルジュ・メリエスという映画監督であり、1902年のことである。その時、人類は地球が外から見たとき青いことは知らされていなかった。しかし、月に行ったことがない私たちが現在それを知っているのは、果てに挑んできた先人、冒険家や調査をするスペシャリストが知識や映像を持ち帰ってくれたからだと言える。

現在、果てはどんどん手の届きそうな場所になりつつあり、私たちは果てを自分の文明の内側に取り込もうとしてきた。

一方、ツーリズムとは何であろうか。そうやってスペシャリストが身近な存在にしてくれた果てに、スペシャリストでない人が行ってみたいとか、見てみたいという理由で行く、それは単にツーリストとしてその場所に行くこと、そうした現象がツーリズムである。例えば、エベレストや南極を想起して欲しい。最初、特別な人しか行けない、特別の目的をもつ人しか行けない場所であったはずが、今やエベレストも商業登山があり、南極ツアーでは年間3万人が訪れるまでになっている。まだ日本人が海外旅行に行けない時代を考えてみれば、当時の日本人にとっては、外国でさえ、ある種の果てであり未知の場所でもあったはずだ。果てはどんどん、果てではなく、ツーリズムの対象になってきている。

では宇宙はどうか。現実には、近年宇宙旅行を企画する会社や団体が出始めている。日本でも旅行会社が宇宙旅行を本気で視野に入れて考えているという事実がある。これは、宇宙旅行は想像の領域ではなく、現実のものとして私たちの目の前に現れてきたということだ。果てに到達することは、人間の衝動にも似たロマンとでも言えるものであり、今や地球上にロマンを刺激する

果てはなくなりつつあると多くの人は感じているのではないだろうか。その時、私たちの前に現れる次の「果て」、それが宇宙なのだろう。

(中子富貴子)

(第3報告)

マヤの宇宙を旅する Traveling the Maya Cosmos

私たちは、「地球は丸くて、太陽のまわりを回っている」と学校で教えられた。だが、丸い地球やそれが太陽のまわりを回っている様を、(映像などではなく)実際に自分の目で見たことがある者がどれだけいるだろうか。おそらく公開フォーラムの会場では山崎直子さんただひとりだったはずだ。それ以外の全ての人々は、地上から眺めた宇宙しか見た経験がないだろう。その際、実際に見えるのは、自分が中心にいる平らな地面と、それを覆っている半球状の空間で、東から太陽や月や星々が昇り、西に沈んでいく様子である。古来この様を、人間の想像力は、豊かな表現、ストーリーで説明してきた。それは世界観、宇宙観と呼ばれる。

このことをマヤ文明の宇宙観を通して考えてみたい。マヤ文明は紀元前1000年頃から後1500年頃にかけて、現在のメキシコ、中米で栄えた古代文明である。現在でもこの地域には無数の遺跡が残っており、これには3件の世界文化遺産も含まれる。そうした遺跡の一部は、カリブ海沿岸のリゾート開発などもあって、現在では人気の観光スポットとなっているが、遺跡が観光客を引きつけるのは、この文明が持っていた科学が非常に高度なものだったことをよく伝えているからである。古代マヤの人々は、独自の方法による長期間の天体観測により、現代人が驚くほどの緻密な天文学的な知識を持っていた。そしてそれは彼らの実際の生活の場にも反映されていたのだ。マヤのピラミッドも、彼らの宇宙観の表現に他ならなかった。観光客はこの文明のあり様に現代の科学の物差しを当てて理解しようとし、そして驚くのである。

この知識の体系は、例えば神話などの中にも表現されている。グアテマラのキチュ・マヤの人々が語り継いでいた「ポポル・ウーフ (ポポル・ヴフ)」という神話がある。これは、旧約聖書や日本の記紀神話と同じ創世神話である。そこでは、まず神が最初に世界を創造するが、自分の意に沿うものになるまで世界の破壊と再創造を繰り返した様が描かれる。それぞれの世界を象徴するのは太陽である。だから、現在の世界が生まれる際には、後に太陽と月になる双子の英雄神が活躍する。そこで展開するストーリーは天体の動きを象徴したものと考えられている。創世神話では、世界や宇宙がどうやって創造され、どんな形になっていて、そしてどう動いているのかに関する全ての事象が、矛盾なく説明されるが、これは現在では科学が説明してくれる事柄だろう。だが、科学による説明はほんの2～300年ほど前に始まったことでしかなく、それまでの長い人

類の歴史の中では神話こそが「科学」だったのだ。そして、この神話で描かれるような「非科学的」な説明は、いまでも我々の世界観や宇宙観に強く影響していることを忘れてはならない。

マヤの遺跡を巡り、神話を読みながら、マヤの宇宙を旅するとき、そのまなざしの中で我々は、いまでは「あたりまえ」になっている現代の科学による認識と、自分たちとは違うマヤの世界観・宇宙観の間を行ったり来たりしている。だが、我々は普段から、地球が丸くて太陽のまわりを回っていることを理解したつもりでいながら、星空に星座を探したり、流れ星に願い事をしたり、死んだら星になるなどと言ったりしていないだろうか。どちらも同じことである。そんなふたつの世界観・宇宙観の間の「行ったり来たり」があるからこそ、宇宙は我々にとり魅力的なものとなっているのかもしれない。今後ロケットに乗って実際に宇宙を旅行するようになっても、それは変わらないだろう。

(杓谷茂樹)